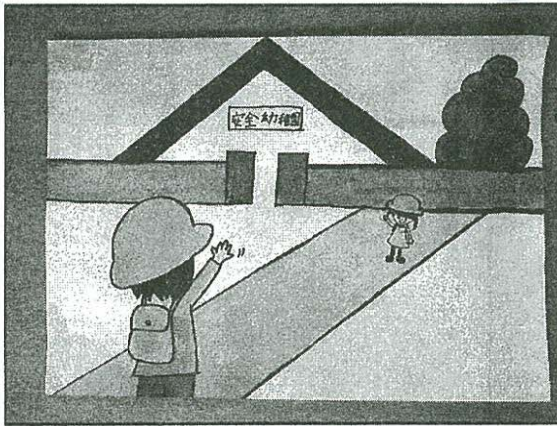




タイトル

じしんとマモルくん

ヤタガラスさんといっしょ



①

僕は防災マモル。
安全幼稚園に行ってるんだ。

マモル
「バイバイ」

友達と分かれてしばらく歩いていると…



②

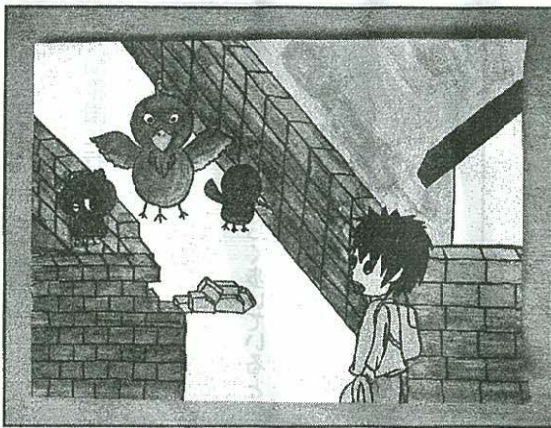
グラグラグラーツ！
いきなり、地面が揺れた。
僕は立っていることができなくなって、
しゃがんで目をつぶった。
しばらくすると大きな揺れがおさまった。
僕はゆっくりと目を開けると…

マモル
「えっ！？」

周りがめちゃくちゃになっていた。



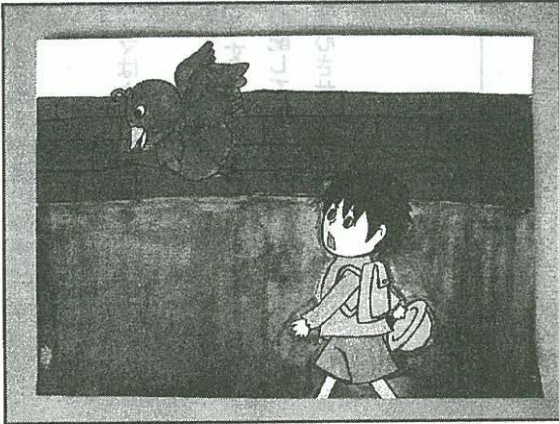
③
 崩れているお家・煙が出ているお家
 マモル
 「うわーん!!!」
 僕は怖くて走ってお家に帰ろうとした。
 ヤタガラス
 「危な—いッ!!!」



④
 僕はそこに止まった。
 前を見ると、いつも歩いている細い道の
 ブロックの壁が倒れかけてた。
 マモル
 「あ、危なかったあ」
 ヤタガラス
 「周りをちゃんと見なくちゃ」
 上を見ると、3匹の鳥さんたちがいた。
 マモル
 「君たちは誰?」
 「おいらはちい」
 「あたしはひい」
 「僕はみい。僕達はヤタガラスなんだあ」



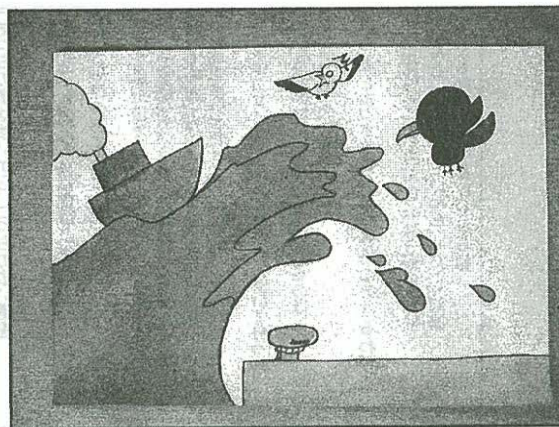
⑤
 マモル
 「ヤタガラス?」
 ひい
 「私たちは、熊野に昔から住んでいる
 鳥なのよ」
 みい
 「みんなを行きたいところまで
 案内しているんだよ」
 ちい
 「さてと、おいらたちについて来て
 マモル君をお家まで連れてってあげるよ」



⑥
 「昔から、この辺りは大きな地震があつてね、100年から150年」とに起きてるんだよ」
 マモル
 「150年!?!」
 ちい
 「そうだよ。60年ぐらい前にも、大きな地震があつたんだ」
 ちい
 「昔なんてさ、たかさんの家が壊れたりして、とても大きな被害を出したんだよ」
 マモル
 「そんなに凄いい地震があつたんだ」
 ちい
 「うん。じゃあ、昔の話はこれぐらいにして、早くマモル君を連れて行ってあげなくちゃね」



⑦
 「「からあはあたし」についてきて」
 そう言つて、ひいが出てきた。
 マモル
 「ねえ、何か焦げくさい」
 ひい
 「うん。どうやら、前の方で火事が起きてるみたいね。じゃあ、こつちよ」
 マモル
 「え? このまま行かないの?」
 ひい
 「そうだよ。この先の道は、家と家との間が狭くて、次々に火がつつちゃうから、すごく危ないの。だから、遠くてもこつちの広い道を使った方がいいのよ」
 マモル
 「そうなんだ。急いでいる時でも気をつけないといけないんだね」



⑧
 「次は僕についてきて」
 そう言つて、みいが出てきた。
 マモル君、それにしてもこは海や川が近くになくて良かったね」
 マモル
 「どうして?」
 みい
 「海や川が近くにあるとね、津波ついでうしろつても恐ろしいものが来るんだ」
 マモル
 「津波?」
 みい
 「津波ついでうしろつても、地震が起きたらくるかもしれない大きな波のことなんだ。強い勢いで海から波がやってきて、お家が波と一緒に流されたりしちゃうんだ。川をのぼつてしまうこともあつてね。川にいる人が流されたり、船とかがひっくり返ったりする事もあるんだよ。だから、海や川の近くにいる、大きな地震が起きたら、少しでも高い所に逃げないとけないんだ。」

⑨
もうちよつとで僕のお家だ。

マモル
「ママは大丈夫かな？」

ヤタガラス
「大丈夫だよ。ママもマモル君のことを心配してるだろうから早く行って安心させてあげなげやね」



「ママとパパの姿が光る。ママとパパは心配してるから早く行って安心させてあげなげやね」

ちつと家へ着いたけど、僕はびっくりした。
「えっ、ウソでしょー？」
僕のお家に、隣のお家もたれかかっていた。僕はママが心配になった。

「大丈夫よ。マモル君のママは避難所に居ると思うわ」

「避難所って何？」

「地震や火事が起きた時に、少しの間みんなで一緒に過すところだよ。」

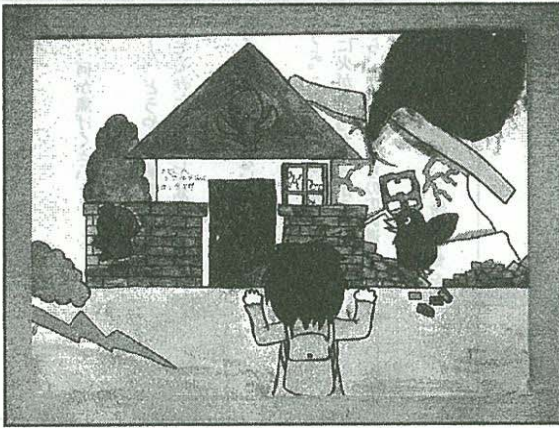
「本当にそこにいるの？」

「ええ、本当よ。だってマモル君のママはここにメッセージを残しているもの」

ひいの居るところを見ると、そこに「44」の字が書いてあった。

「じゃあ、ママのところにいって」

「うんー！」



「ママとパパの姿が光る。ママとパパは心配してるから早く行って安心させてあげなげやね」

僕、近道知ってるから、あっちの道で行こうよ！
「あっちの道は狭いから、こっちの広い道を歩いていくよ」

マモル
「え？あっちの道の方が近いよ？」
僕は狭い道の方を指差した。

「いつもは近道でもいいんだけど、大きな地震の後には余震っていう小さな地震が何回も起きるんだ。だから、遠くてもこっちの広い道を歩いて行く方が安全なんだよ。」

僕はヤタガラスさんに連れられて歩いて行ったら、

「おいら達が連れて行ってあげるのはここまでだよ。」

「この道をまっすぐ進むと避難所に行けるわ。」

マモル君がママやみんなの言う事を聞いて、ちやんといい子にしていたら、あたし達はいつでも助けに来てあげるからね！」



「ママとパパの姿が光る。ママとパパは心配してるから早く行って安心させてあげなげやね」



「マールくん！これから行く避難所では、
 たくさんの人がいるんだ。それに、
 みんなでご飯を食べたり、トイレにも
 同じものを使わなくちゃいけないだよ。
 だからあんまりわがまま言うちゃダメだよ」
 「うん、わかった！みんなありがたう！」
 僕はヤタガラスさん連とさよならした。
 避難所に着いて、僕はすぐにママを
 探したけど、人がたくさんいて
 ママがどこにいるのかわからなかった。
 その時！
 「マール！ー！」
 奥の方から、僕を呼んでいる声があった。
 それはママの声だった。
 「ママありー！」
 僕はママに抱きついた。
 「マール！よかった無事で！」
 ママもマールを心配してたのよ」
 「大丈夫だよ、ママ！ヤタガラスさんってう
 鳥さん達がこゝまで連れてきてくれたんだ！」
 「じゃあ、そのヤタガラスさん連に
 ありがたうって言わないとね！」



「さっきパパから連絡があつてね。
 パパも大丈夫なんだって」
 「パパも無事だったんだね！よかったあ。」
 「マール、こゝではみんなが力を合わせて、
 避難所を使うのよ。だから、
 さわいんだりわがまま言うちゃダメよ」
 「うん、それもヤタガラスさん連に
 教えてもらったんだ。いい子にするよ！
 それに、ヤタガラスさん連は
 いい子にしていたらいつも助けに
 来てくれるって言うてくれたんだ！」
 「いい子ね。じゃあ、みんなの言うことも
 ちゃんと聞けるわね」
 「うん、ちゃんと聞くよ。僕にはママが居れば、
 もう怖いものはないから大丈夫だよ！」
 というわけで、マール君は怖い地震にあつた時には
 どうすればいいのかを、ヤタガラスさん連から
 色々教えてもらいました。
 地震は来てほしくないけど、もしも地震が
 来たらこのヤタガラスさん連のお話を
 思い出し、危くない所へ逃げましょうね！
 おしまい